

## 中等教育英語教材としてのヘミングウェイ作品の可能性 : 大学学部教育における、学習指導案作成と模擬授業実践を通して

著者	千代田 夏夫
雑誌名	鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編
巻	69
ページ	139-147
発行年	2018-03-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00030115">http://hdl.handle.net/10232/00030115</a>

# 中等教育英語教材としてのヘミングウェイ作品の可能性 —大学学部教育における、学習指導案作成と模擬授業実践を通して

千代田 夏夫<sup>1</sup>

(2017年10月24日 受理)

## Hemingway's Works as English Texts for Junior High School Students: Simulating Classes at College

CHIYODA Natsuo

### 要約

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) 作品の英語科教育における教材としての可能性については幾つかの先行研究が存在するがそのほとんどは高等教育におけるケースを論じたものである。本稿は筆者による実際の大学学部教育において、中学校三年生の英語科の授業という中等教育の現場を想定して行われた作品選定作業、英語科学習指導案作成および模擬授業の実践をもとに、日本で最も親しまれているアメリカ文学作家の一人であるヘミングウェイの作品について長編『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) と短編「インディアン・キャンプ」("Indian Camp," 1925) を中心に、その英語科教材としての適性の高さ、そしてそれにとどまらず性教育・文学教育とのクロスジャンルの可能性の大きさを、グローバル化やダイバーシティ (多様性) 対応が強く求められる現代日本社会の教育をめぐる現状と照合しながら、検証したものである。

**キーワード:** 英語科教育、中等教育、学習指導案、ダイバーシティ (多様性)、ヘミングウェイ

---

<sup>1</sup> 鹿児島大学教育学系 准教授

## ・はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の作品の、英語教育における教材の適性については少なくない論考がすでに出されている<sup>2</sup>。本稿では鹿児島大学教育学部において2017年度前期、学部間授業として開講された「英語科指導法Ⅱ(文学)」において教材として選ばれた『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) および「インディアン・キャンプ」("Indian Camp," 1925) のケースを検討したい。本授業は学習指導要領に基づいて中学3年生の英語の授業を想定し、アメリカ文学作品を教材として学習指導案作成から模擬授業までをグループ単位で行う。

本講義においてヘミングウェイ作品は、2013年度開講分において「インディアン・キャンプ」「雨の中の猫」("Cat in the Rain," 1925)<sup>3</sup>2014年度において本年度と同じ『日はまた昇る』<sup>4</sup>、2016年度において「何かの終わり」("The End of Something," 1925)「雨の中の猫」「一日の猶予」("A Day's Wait," 1933)「インディアン・キャンプ」(当該年度は二回取り上げられた)<sup>5</sup>が選定されている。

2017年度を受講者は計25名、内訳は2年生14名(内法文学部1名)3年生2名4年生9名(内法文学部1名)、男女比は2:3であった。『日はまた昇る』を教材として選定し模擬授業を行ったグループは4名から構成され、4年生2名2年生2名、男女比は3:1であった。第一次世界大戦後の「失われた世代 (lost generation)」たる「国外居住者 (expatriates)」の生活をヨーロッパを舞台に描き出したヘミングウェイの代表作であるが、本授業においても過去に多く教材として選ばれたヘミングウェイ作品との相違点はまず本作が長編であるということである。本授業は可能性を探ることを第一義とするものであるため、作成される学習指導案と行われる模擬授業が、一時間完結のものでも一年にわたるものでもその別は問うていない。

## 1. 長編採用時の問題点

長編を本授業の目的に沿って扱う際の問題点については、特にナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) の『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) について特に種々の問題点が明らかになる傾向が顕著である。本授業は2014年度開講分からアメリカ文学を教材に用いるという条件に加え、ジェンダー・セクシュアリティ面からのアプローチを求めているため、「姦通」がテーマの『緋文字』はしばしば選択されやすい。

2014年度に現れた教師側が原文翻訳問わずテキスト(作品)を読んでいないという事例<sup>6</sup>は論外としても「長編を原書のまま扱う場合……クロスジャンルの試みが必要でもあろうし、最低限[2014年度の]『日はまた昇る』のように、全体のあらすじを俯瞰しつつ、テーマ

<sup>2</sup> 関戸、Pavloska など参照。

<sup>3</sup> 千代田 (2014)、98:100。

<sup>4</sup> 千代田 (2015)、109-10。

<sup>5</sup> 千代田 (2017)、97:99:100。

<sup>6</sup> 千代田 (2015)、115。

に即した章を一つ採択するのがぎりぎりのところ」であるということ、「長編の散文はまず何よりも（教師側が retold/original の別を問わず）原著で読まなくてはならないし、その覚悟なしに扱うべきではない」（千代田（2015）115）と筆者自身論じたことであった。2015年度は retold 版を用いた授業案が出されたがここで問題となったのは「あらすじ」であった。長編を選定した場合、原著 / retold の別を問わず、いずれかの段階で作品全体のあらすじを生徒に示すことが不可欠であるが、その作成において錯誤が生じることが多い。2015年度『緋文字』を教材に選択したグループは本作のクライマックスであるディムズデイル牧師が公衆の前で自らの胸をはだけて見せる場面で「胸を押し開いて肉体に生々しくやきつけられた A の字を見せた」と記したが、原著、retold とともにそのような記述はない。牧師の胸に A の字があったかどうかはあくまでも曖昧なまま残されることにホーソーンの特長があるのである<sup>7</sup>。2016年度でも『緋文字』の retold 版を用いて全編を扱う計画が出されたがやはり「一番の問題は」 「あらすじ作りにあった」。上述のようにホーソーン文学においては一種のオープン・エンディングとも重なる曖昧さがその核を成すが、当該グループが配布資料の「あらすじ」に記載したディムズデイル牧師の「七年前の罪の告白」は原著においても retold 版においても行われていない（千代田（2017）97）。長編という量の問題を充分解消しないままジェンダー・セクシュアリティのテーマに急ぎすぎればこのような錯誤が生じるのであり、選択した作家の文学の本質を見誤れば、「文学を教材に用いること」の意義は本末転倒の様相を呈することとなる。

長編を扱う際のこのような問題点を超克したのが、ヘミングウェイの長編を扱った過去の事例であることは示唆に富む。2013年度に選択された『老人と海』（*The Old Man and the Sea*, 1952）は長編としては短めの作品ではあるもののやはりアプローチには工夫が必要な分量である。当該グループは全 18 時間というふんだんな時限数をまず想定し、さらに最終的には文化祭で英語紙芝居を上演するという目標を設定することで、二次元の英語読解から三次元の上演という移行を含んだ、クロスジャンルの試みを想定し、この長編を扱う立案に説得力を付与したのである<sup>8</sup>。2014年度には『日はまた昇る』の第 6 章が教材として選ばれこの一章を七時限で扱う計画が立案された。詳細は千代田（2015）を参照されたいが、ジェンダー・セクシュアリティ面のアプローチが求められる中当該グループは「結婚観の違い」をテーマとし、語り手ジェイク・バーンズと並んで重要な登場人物であるその友人ロバート・コーンと恋人フランセスに焦点を当てた模擬授業が行われた。長編を扱う場合、特定の章に特定のテーマをもって臨むことは、先に見た『緋文字』における大分量ゆえに生じる乱暴なアプローチを避ける意味でも非常に有益な方法であるといえる。

## 2. 2017年度における『日はまた昇る』の扱い

以上を踏まえて本年度『日はまた昇る』を教材に提案された指導案と模擬授業を見てみたい。

<sup>7</sup>千代田（2016）123 参照。

<sup>8</sup>千代田（2014）99 参照。

当該グループは全7時限を想定し全19章3部構成になる本書の第一部(Book I)のみをテキストとする。模擬授業ではその七時限の第1限目が行われた。第一部はスペイン・パンプローナにおける闘牛をクライマックスとする本作において、フランス・パリを舞台に登場人物らの関係性がさまざまなエピソードによって示される箇所であり1-7章までを含む。指導案には「今後作品を読んでいく上での導入活動」として「登場人物の会話を抜粋し、これに関して生徒に発問を行う」とあり、「生徒から出た意見を基にジェンダーの視点から(教師が)授業をまとめ」、「自分と異なる意見を受け入れ、共感することが出来る生徒を育成」という目標、「そのために、活動の際には他人の意見を批判したり見下したりしないというルールの下、グループや全体での議論によって生徒の多様な考えを引き出して生きたい」とまとめられる。「自分と異なる意見」「共感」「多様な考え」等、昨今喫緊の課題となりつつあるグローバル化および多様性(ダイバーシティ)教育に必須のキーワードが指導案に見られることに留意したい。

当該グループが焦点化した登場人物間の会話とは、語り手ジェイクとヒロインであるブレットのあいだで交わされる以下の会話である。

“Couldn’t we live together, Brett? Couldn’t we just live together?”

“I don’t think so. I’d just *tromper* you with everybody. You couldn’t stand it.” (62, italics original)

「なあ、おれと一緒に暮らさないか、ブレット？二人で一緒に暮らさないか？」「それはやめたほうがいいと思う。あたし、きつといるんな人と付き合っ、あなたを裏切ってしまうから。あなたは我慢できないわよ」(高見訳107)<sup>9</sup>、当該グループは課されたジェンダー・セクシュアリティ面のアプローチとして「結婚」を選択し、一種のプロポーズとしてこの会話を解し、指導案および模擬授業の中心に据えたのである。ワークシートは「①自分の理想の人から次の質問をされたらどう答えますか。Question: Can we live together, ( )? Can we just live together? ②今度はあなたが①の質問をする立場になってみましょう。この時、相手が次のように答えたらどう感じますか。Answer: I don’t think so. I will disappoint you with everybody. You can’t stand it」(原文ママ)の質問から構成される。

原文の否定疑問文が通常の疑問文になっている点、フランス語の *tromper* が *disappoint* になっている点に生徒として想定される中学生の能力を考慮した工夫が見られる(*disappoint you with everybody* が英語として機能していない点は講義において指摘した)。

その上で問題点を二つ指摘したい。これは第一次世界大戦中の負傷によって性的不能になっているジェイク・バーンズと英国人貴族との離婚手続き中の一種のプレイガール、ニンフォマニア(色情狂)たるブレット・アシュレイ<sup>10</sup>との会話であるというその文脈が無視されてい

<sup>9</sup>ここでは便宜上現在もっとも入手されやすい高見浩訳(新潮文庫)を引用した。

<sup>10</sup> Hays 69 参照。

る点である。文脈を無視して自身のテーマに沿った文章のみを抜き出すのであれば、それはもはや文学を教材にしているとはいいがたい。文脈の理解は、とくに情操教育の一環として文学教育をとらえた場合、当該グループが指導案に記した「他者への共感」に直結するものだからである。ジェイクの性的不能とブレットの離婚およびセックス依存症は本作における不可欠の要素でありかつ両者ともに本授業で受講者に要求されるジェンダー・セクシュアリティ面からのアプローチ・テーマと深くかかわるものであるゆえに、その点についてより細やかな配慮、具体的には原著での両者の位置づけの説明がほしかった。翻って当該グループがこの長編作品を教材として扱うにあたり選定した第一部は重要登場人物の大部分が出揃う箇所であり、この文脈無視の問題は、登場人物の属性確認を早めに行うことである程度防ぐことの出来た事態かとも思われる。

ヘミングウェイ作品が英語授業の教材として用いられる理由の一つにその平明な英語がある。一文一文も長くない。しかしそれは作家独自の「氷山理論」<sup>11</sup>に基づくものであり、その「省略」ゆえにヘミングウェイ作品には独自の難しさが生じるともいえるのである。文脈を考えずに都合のよい箇所だけを抜き出せば、ますますヘミングウェイ文学の本質は失われることに注意したい。

第二に原文の *tromper* というフランス語の扱いである。第一次世界大戦後世界最大の債権国民となったアメリカ人がその財力をもとにヨーロッパで放蕩の日々を送ったその時代の年代記の様相も有する本作において、パリを舞台とする第一部においてはフランス語がフランス語のまま原文に現れることには注意せねばならない。特に恋愛関係におけるフランス語の単語にはフランス語でしか表しえないニュアンスがあるのでありそれゆえにヘミングウェイもここで *tromper* という語を用いるのである。結果論としては当該グループが行った *disappoint* という「翻訳」はそれほどの外れなものとは思われないし模擬授業のテーマに沿ったものとして評価できるが、しかし原文におけるフランス語単語の採用については、本作また自身パリに縁深い「国外居住者」であったヘミングウェイという作家の特質上、充分な注意喚起が求められたところであった。

「結婚観」というテーマへ急ぐあまり、文学の細やかにして複雑な含意の数々—それを文脈と言い換えることも可能だろう—を無視して都合のよい「切り張り」をすることは文学を教材に用いるという本来の意義を転倒させる危険をはらむものである。これはすでに本稿において過去の複数回にわたる『緋文字』のあらすじ作成における錯誤に関して述べたとおりである。

### 3. 「インディアン・キャンプ」

過去にも採用された短編「インディアン・キャンプ」は2017年度も選択された<sup>12</sup>。当該グループは5名構成、内四年生1名三年生1名二年生2名、男女比は2:3であった。難産に

<sup>11</sup> 『ヘミングウェイ大事典』759-60 参照。

<sup>12</sup> 参考文献には当該グループが模擬授業で用いた版を挙げた。

苦しむインディアン（ネイティブ・アメリカン）女性（以下便宜上インディアンと表す）を救うべくインディアン居住区に向かったニック少年、父、ジョージおじであるが、インディアン女性に対する父の麻酔なしの分娩成功と女性の夫の自死という二つの衝撃的経験を経たニックは、また父とともに湖上を帰途につく。その場面にジョージおじの姿はないという、多くのテーマが極めて濃密に凝縮されたヘミングウェイ短編の傑作である。計7時限を想定し模擬授業ではその七限目が披露された。指導案には「『自殺』『出産』内容を中心に考えながら様々な物事に対する男女の価値観や考え方には違いがあることを理解し、固定概念化された男子観・女性観にとられることのない生徒を育成したい」（原文ママ）とある。ワークシートには「Question 1 なぜ、インディアンの女性の夫は自殺してしまったのでしょうか。考えてみよう」「Question 2 6頁のNickとNickの父の会話を見よう。Nickの“Do many me kill himself, Daddy?”“Do many women?”に対して父はそれぞれ、“Not very many, Nick”“Hardly ever”と答えています。「自殺」に関して男性と女性の違いが見える応答と言えますね。父は何故このような応答をしたのでしょうか。考えてみよう」の二問が設定される。「指導上の留意点」として指導案に記された「生徒からの意見を踏まえて、出てきた意見は固定された男性観・女性観ではないかと投げかけ、固定化された概念にとられる必要はないことを確認する」（原文ママ）に照合して、ジェンダー・セクシュアリティを読み込むことを求める本授業の方針に鑑みても、まずは適切な計画といえる。

2013年度本授業において「インディアン・キャンプ」が選択された際にもこの父子のやり取りが焦点化された<sup>13</sup>。また2016年度においては妻の帝王切開手術中に行われた夫の自殺を容認するか否かを論題とするディベートが、高知県教育センターによるデベート・ガイドラインを準拠枠として導入されるまで自殺のテーマは深化されている<sup>14</sup>。出血を伴う咽頭部の掻き切りという自殺の衝撃的描写については「文学が必然的に持っている『毒』（千代田（2014）98）として許容可能であること、自殺を肯定する論調に至った場合のクラス・マネジメントの難しさ（千代田（2017）101）などをすでに筆者は指摘してきたが、その問題は常に論じられるべきでもあろう。

『日はまた昇る』において焦点化された「結婚」というテーマであるが「インディアン・キャンプ」ではその結婚に連続する「出産」と夫の自殺による「結婚の破綻」までが作家独自の無駄をそぎ落としたハード・ボイルドな文体でまとめられている。恋愛-結婚-出産（次世代再生産）までを連続した系として社会生活の標準的規範とする「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」は今日に至るまで日本を含むいわゆる先進国社会においていまだ圧倒的な支配力を有しているが、本作ではアメリカにおいては十九世紀を通して白人社会に定着したそれ<sup>15</sup>が、非白人のインディアン社会において脱構築されている点にも本作の性教育教材としての可能性の幅の広さが窺われよう。「近代医学という白人文明によるインディアン文化への侵食が、

<sup>13</sup> 千代田（2014）98.

<sup>14</sup> 千代田（2017）101.

白人男性医師によるインディアン女性への麻酔なしの局部手術という形で成されている、いわば『二重のレイプ像』として映る可能性」(千代田(2017) 101)も、塚田の記述<sup>16</sup>とあわせて再度考えあわせたい。

#### 4. LGBT 教育の試み

2017年度『日はまた昇る』の模擬授業では、上記ワークシートに加え、そのデモンストレーションとして男女の人気芸能人の写真を貼り付けた札とともに上記質問を教師側が発し、生徒とやり取りをする試みが行われた。特記すべきは生徒側が同性の芸能人を選んでやりとりがおこなわれたケースが見られ、その際にも周囲からひやかしの声などが起こらなかったことである。これは高く評価されるべきである。2016年度のあるグループは「インディアン・キャンプ」を教材に選定しながら「少子化問題が叫ばれる中での結婚・出産という規範の強調とジェンダー・セクシュアリティにおける多様性容認への疑義」をあえてデモンストレートして見せた<sup>17</sup>。ここにも性の多様性認識の深まりが逆説的に映し出されているだろう。

2017年9月にはゲイ男性を揶揄したキャラクターの28年ぶりのテレビ放映が大きな議論を呼んだ<sup>18</sup>。グローバル化、多様性、英語教育の有機的連関についてはすでに記してきたので繰り返さないが<sup>19</sup>、性の多様性を巡る日本社会の状況は日進月歩の変化を見せるとともに新たな問題も続出している。「性的マイノリティ」とされる人々のパートナーシップを認める条例策定の一方で、上場企業のうち「性的少数者(LGBT)の人材受け入れや活躍推進に積極的に取り組んでいるのはわずか3.6%で、女性や障害者、高齢者に比べ、対応が遅れている」<sup>20</sup>。昨今多く主張される「ダイバーシティ」のアピールにしても女性を対象とした取り組みが圧倒的であり、「多様性(diversity)」の名のもとに男/女の二分法が反復強化されるというパラドクスが生じている。筆者が本授業で志向し続けている英語教育・性教育・文学教育のクロスジャンルには、2020年度から小学校においても正課として英語が導入される状況を改めて考慮するとき、その不可避な英語の「怒涛」の中で自らを失わずにいるためのアイデンティティ・ポリティクスの要となる意義もまたあると思われるのである。

#### ・おわりに

ジェンダー・セクシュアリティ問題を扱う教材としてもヘミングウェイ作品は多くの可能性を秘めている。モダニズムのアメリカ文学を代表する三人の作家すなわちF.スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald, 1896-1940) ウィリアム・フォークナー(William

<sup>15</sup> ノッター 20-21; 27-30 参照。

<sup>16</sup> 『ヘミングウェイ大事典』87。

<sup>17</sup> 千代田(2017) 101-102。

<sup>18</sup> <http://tovokeizai.net/articles/-/191609> 松岡宗嗣氏による本論考は問題点をよくまとめている。2017年10月21日閲覧。

<sup>19</sup> 直近の筆者による論考として千代田(2017)参照。



Faulkner, 1897-1962) ヘミングウェイのうち、もっとも読み取りやすい形でジェンダー・セクシュアリティのゆらぎを作中に示しているのがヘミングウェイであるといえる。たとえば「フェティシズム」とも呼べる男女問わずの髪への執着とジェンダー不安の結びつきは『日はまた昇る』『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929)等の長編、本授業でも過去に教材として選定された「雨の中の猫」等の短編にも明らかである<sup>21</sup>。また髪フェティッシュ化が男性の去勢不安に結びつく場合も多い<sup>22</sup>。すでに見た「インディアン・キャンプ」において夫の自殺を自らの脚の怪我による男性性喪失不安に拠るものという見解を示した2016年度のあるグループ<sup>23</sup>は、西洋文学における中世以来の伝統であるフィッシャーキング伝説としばしば結び付けられることも多い『日はまた昇る』のジェイクの局部負傷の問題にも通じるものとして示唆に富む<sup>24</sup>。

多様性(ダイバーシティ)やグローバル化など理解されるべき非常に重要な概念でありながら言葉ばかりが先行している感の否めない現代日本社会、その教育の現場において、文学という「実践的でない」と切り捨てられがちな素材を用いることは、上記ターム・概念群の親身な理解に不可欠な、「自分と異なる意見」への「共感」、「多様な考え」の尊重—これらは2017年度本授業のあるグループの作成した指導案に現れた語である—の涵養に非常に有効であると思われる。グローバル化とセットになって語られることも多い英語教育の充実であるが、ヘミングウェイ作品はその英語の(一次的な)平易さ、文章の短さ、短編の場合は分量の少なさ、そして豊富なジェンダー・セクシュアリティテーマの潜在(あるいは顕在)などをもって、21世紀のグローバル化社会において、本授業が想定している中学3年生にも充分受け入れられることの可能な、英語教育はもちろん性教育・文学教育の面までもカバーする無尽の可能性を持った教材と考えられるのである。

## 参考文献

- Eby, Carl P. *Hemingway's Fetishism: Psychoanalysis and the Mirror of Manhood*. State U of New York P, 1999.  
 Hays, Peter L. *The Limping Hero: Grotesques in Literature*. New York UP, 1971.  
 Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises*. Scribner, 2006.  
 --. "Indian Camp." 藤井健三・安達秀夫『現代アメリカ二大作家 Collected Short Stories of Two Great Modern American Authors』参集社、1982、1-6.  
 Pavloska, Susanna 「ヘミングウェイの短編を用いたラジオプレイの試み」吉村俊子・安田優他編『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』栄宝社、2013、162-70.  
 今村橋夫・島村法夫監修『ヘミングウェイ大事典』勉誠出版、2012.

<sup>20</sup> 日本経済新聞 2017年8月14日。

<sup>21</sup> 「雨の中の猫」における“I get so tired of looking like a boy”という妻の台詞などへの焦点化については千代田(2014) 100参照。

<sup>22</sup> Eby 39参照。

<sup>23</sup> 千代田(2017) 101参照。

<sup>24</sup> Hays参照。

LGBT 法連合会編『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』かもがわ出版、2016.

関戸冬彦「英語教材としての文学作品の可能性—ヘミングウェイ作品の場合—」『横浜国立大学 大学総合教育センター紀要』第1号、2011、28-35.

千代田夏夫「中学校英語教育教材としての米国文学作品—大学学部教育におけるテキスト選定作業を中心に—」『鹿児島大学教育学部教育実践紀要』第23巻、2014、95-102.

一、「中等教育英語における、米国文学とジェンダー・セクシュアリティ—高等教育での教材選定と模擬授業を通して—」『鹿児島大学教育学部教育実践紀要』第24巻、2015、103-118.

二、「高等教育における中等教育英語科指導法のあり方—教材としての米国文学とジェンダー・セクシュアリティ問題を通して—」『鹿児島大学教育学部教育実践紀要』第25巻、2016、117-132.

三、「中等教育英語科指導法における、英語・文学・性教育のクロスジャンルの探求—大学学部教育における実践を通して—」『鹿児島大学教育学部教育実践紀要』第26巻、2017、93-107.

ノッター、デビッド『純潔の近代 近代家族と親密性の比較社会学』慶應義塾大学出版、2007.

ヘミングウェイ、アーネスト『日はまた昇る』高見浩訳、新潮文庫、2003.